

山川方夫全集

第三卷

小説Ⅲ

冬樹社

山川方夫全集
第三卷



昭和四十四年十二月十五日 第一刷発行
昭和四十九年十月三十一日 第三刷発行

著者 山川方夫

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二一八

電話 二六四一〇三四六 一〇一

振替 東京七七五七

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二一二

製本所 一重製本加工所

東京都中野区本町五一二七一九

装幀 山川みどり

目次

猫の死と	5
街のなかの二人	25
外套の話	103
夜の中で	120
月とコンパクト	157
夏期講習	174
愛のごとく	204
夏近く	251
旅恋い	271
煙突	304

「別れ」が愉し	351
最初の秋	376
千鶴	421
ゲバチの花	448
展望台のある島	464
春の驟雨	499
Kの話	525
遅れて坐った椅子	545
解説	563
安岡章太郎	

山川方夫全集 第三卷

小說
Ⅲ

猫の死と

その年の十二月、彼の家では二匹の飼猫が死んだ。

雄の虎猫と、洗い晒したような薄茶の斑点が、片耳と胴と尻尾の先に散った白の雌猫とである。雄が「太郎」、雌が「タマ」という名前、太郎は二歳あまり、タマは六歳だった。二匹とも、近所で評判の美しい猫だったが、性格はまるで反対で、雌が美貌の公爵夫人のようにプライドが高く、利口で気も強いのに比し、雄は町のあるちゃんよろしくの体つきのくせに、気が弱く、愚鈍で、甘えん坊だった。(猫の年は、人間でいえばはじめの一年が二十歳、あと一年ごとに四歳というのだから、そうするとタマは四十歳、太郎は二十四、五歳の青年だったわけだ。)

二匹は親子ではない。タマはいわば「家つきの娘」だったが、太郎は長姉が海岸から拾ってきたのである。はじめ、タマはまるで自分の仔のようによく舐め、面倒をみてやったが、やがてかれが一人前の男性としての態度を示しだすと、猛烈に怒り、引っかき、噛みついて、寄せつけないようになって

た。同じ座布団に眠るのさえ、彼女には我慢ならないようであつた。そして太郎は、その頑丈な体軀に似ずひどく弱虫で、意気地がなかった。かれは、タマを求めて集る近所の雄猫のすべてに手ひどくやつつけられ、遠い塀の上からタマの夫婦關係を哀れな泣声をあげて眺めながら、といって家を出て違ふ雌をさがす勇氣も力もなく、余儀なく見るも悲惨な童貞をつづけた。

結局、それが二匹の死病の原因になつた、といえるのかも知れない。

その年の元日、朝っぱらから太郎は嬰兒のような慾望の叫び声をはりあげてどこかへ消えた。臆病者のかれにしては、最初の、しかも上出来の遠出で、年始の客が三百米ほどはなれた国道の菓子屋の店先きで「お宅の太郎さん」を見かけたといった。そのままかれはまる三日間帰らず、四日の朝になつて、やっと台所で食器のアルミ皿を執拗に舐めまわすいつものかれの物音が聞こえた。

「へえ、しゃれてるぜ。太郎のやつ、朝がえりときた」

台所へ出て、おどろいて彼は声をあげた。

太郎は、見るも無残な姿だつた。噛まれた傷のように片脚のつけ根が赤く剥けて、腹や首はところどころ銅貨大の大きさに毛が脱げ落ち、背骨の瘤が算えられるほど全身は痩せおとろえ、面変りしたように顔もひきつれてしまつてゐる。空っぽのアルミ皿を、いつまでも舌で押しやる食慾の執念深さだけが、ふだんのかれの姿だつた。

「……よくよく、女運の悪いやつちゃ」

と祖父が嘆息とともにいった。「はじめて女郎買いに行つて、お土産をもらつてきよつた。……よ

く、くそ真面目な男でこういう不運なやつがいるもんだよ。アワレなやつちゃ」

そして、祖父は宣言した。

「いいか、この猫、絶対にわしの部屋には入れんといてくれよ。もし、ノコノコ入ってきよったら、わしは海へ蹴りこんでやるから」

はやくも、長姉は涙をながしていた。「かわいそうに、きつと咬まれたのよ。太郎ったら、弱虫なんですもん」と、新しい牛乳を皿にあげてやりながら長姉はいった。

だが、日のたつにつれ、どうやら祖父の言葉のほうに正しかったのがわかった。それは外傷ではなく、伝染する病気だった。

いっぱしの大人のくせに、仔猫のような稚い柔らかな毛並みで、太郎はよくじゃれる猫であった。食欲だけは普通以上にあり、あいかわらず愚鈍に、元気に、こちらの手の動きにじゃれついたりしながら、かれは、よろけて倒れることが多くなった。

夏が、その最も悪化した季節だった。ほとんど全身の毛が抜け落ち、つぶれたように目の細く吊りあがったかれの発するソプラノの奇声は、家にあそびにきた人びとをひどくおどろかせた。

秋に入ると同時に、だが太郎は快方に向った。ペニシリン軟膏の悪臭が、ひきびさに家から途絶えたのは十月の半ばころだったか。夏ごろから太郎に同情し体を寄せあっていたタマにあらわれていた同じ症状も、軽微なまま消えかけ、家族たちは、大儀そうな彼女の近ごろの奇妙な温和しさの原因を、その妊娠のせいだけ思っていた。

十一月、タマは二匹の仔を流産した。それは、むしろ喜ぶべきことに思えた。とたんに病気が悪化してきたのである。急激に彼女の顔は夏の太郎のようにひきつれ、美しく張ったその大きな澄んだ瞳は、同じように目脂で膠づけされ細く吊り上って、鼻はこべこべに真黒く汚れ、耳はかさぶたのように分厚く、かたまつて毛の脱け落ちるその体は湿っぽい熱氣をもち、もはや廊下の古い籐椅子に置かれた猫用の座布団にうずくまつて動かなかった。

彼女には、どこといって傷は無く、薬をつけることができなかった。ペニシリンの注射はどうかという意見もあったが、海岸のその町には獣医は居ず、家の経済状態もあって、打つ手はなかった。ただ、食慾だけは普段以上なので、なるべく栄養価のたかいものをあたえて回復を待ちつつけた。

責任を感じたもののように、太郎はタマに体をすり寄せ、思い出すとはその全身を舐めた。タマは無表情に、不機嫌すら示さなかった。晴れてできる看護に、太郎はほとんど全快した自分を忘れ、タマと起居をともして離れようとしめない。廊下のその隅にはむっとした熱のこもった異臭がただよい、終日二匹の体を舐めあう音がつついて、朝になると、いつもおどろくほどの量の抜け落ちた毛が羽毛のように散り敷き、掃くと小さな鼠いろの糞になった。

太郎もふたたびその病気の徴候をあらわしはじめた。

毎日、その二匹の乗った籐椅子を、暖かいところに出してやるのが長姉の仕事だった。

そうだ。彼の家庭の話をしておこう。

二匹の猫のいるその家は、湘南の海岸にある。松林の中の家は海に面していて、庭から急な傾斜で、

直接に砂浜につづいている。

祖父と母と五人姉弟の家族は、焼けのこった（まだ、そんな表現にリアリテイのあった時代だった）東京の家をある電機会社の寮にして収入を得ていたので、母と妹二人はそちらに定住し、祖父と彼が亡父の建てた海岸のその疎開先で暮して、二人いる姉の一人ずつが交替に女中がわりにその疎開先に滞在した。それはまた姉たちにとり、息抜きの意味にもなっていたのである。

ことに長姉にその傾向が濃かった。彼女は動物が好きで、海岸の家で、犬や猫はもちろん、かつては十数羽の鶏や兎、二頭の豚まで一人で世話をやいていた実績がある。

いまは猫が二匹、犬が二頭しかいない。交替制のおかげで、それが限度なのだ。で、長姉はかれらの仔を手放すとき、かならず涙をながし、少女趣味の首輪を毛糸で編んでいっしょに渡す。それがいやで仔を産まさないように、とも思うのだが、仔の愛らしさが、シジフォスの岩のごとく、その度に彼女の決心を破壊するのである。

もしできたら、山羊や牛や馬、ライオンまで飼いたい。それが彼女の願いだった。長姉は人間のわずらわしさ、人間というものの曖昧さ厄介さが、極端に嫌いだった。

「私、牧場があればいいわ」

といって、それならば、と北海道の牧場主との縁談をもってきた知人に、「あら、私のいったのは人間のいない牧場のことよ」といって呆れられた。

「せめて猫なみに扱ってもらいたい」とは、ある求婚者の言葉だった。長姉は目をむいて、「とんで

もない」と答えた。彼は会社で間違いをしでかして破談になった。

だが、次姉があとにつかえていることもあって、四方から決意をせまられ、長姉はその十一月の半ばに見合いをした。彼女の期待に反し、先方は乗気になり、十二月はじめ、当人の兄夫婦が会いにくることにきまつた。母が強引に長姉の気持ちを押し切つて、応諾をあたえていたのである。

その年の歳末は父の七回忌に祖母の十三回忌が重なり、ただでさえ忙しい寮の戦場のような師走の慌しさのなかで、吉凶二つの話が母を中心にすすんでいた。ちょうど、ただ一人の男の子の彼は、軽い肺浸潤で翌春にかけての半年間の安静を医師から命じられている。母の奮闘は見えてやりきれなかった。

しかし、やっと大学一年の彼にはなにもできなかった。彼は休学して、週に一度ずつ東京の病院に通っていた。

ただそれだけのことにすら疲れて、東京の家に泊ることがあった。そんなとき、彼は母の必要に迫られて飲む酒の量が次第に増えているのに、心が痛くなった。

「要らん心配せんといて。なんや子供のくせに」

笑いながらでも、そういわれることは辛かった。母は東京での生活が二十数年にもなるのに、京都弁しか話さない。生れた町の言葉を頑固にまもっていた。

「お酒でも飲まへんだら、かないまへんわ、あて」

そのあげく、もともと気のつよい母は、あてはマッカアサーや、ヒットラーや、と自称して泣く。

「ひとり勝手にお死にやして、無責任もいいとこや」と父のことを毒づく。微熱と小さな背の痛みを気にしながら、二十歳の彼は無理に目を閉じるようにして自分の無力さに耐えつづけた。

長姉は二十五歳だった。

一応、申し分のない相手との今度の縁談を彼女が渉るのは、現在に満足しているのでも、新しい生活に入る面倒がいやなわけでもなく、結局は本人がどうしても好きになれないタイプだからだ、と長姉は説明した。「私だって、今度は考え方をあらためて、すごく真面目になっているのよ。でも、それはゼイタクとかなんとかいわれる以前の、もっと根本の問題じゃない？ 好きになるのは無理にしても、なんとかなんでもなくなろうと一所懸命なんだけど、ちょっとでもそばへ来られるとゾーッとしちゃうの」

「でも、お母さまは、いって返事をしちゃったんだろ？」

「だから困っちゃうのよ。私、本人に、はっきりそういつてきちゃおうかって思うの」

そのころ、毎夜のように海岸の家で長姉と彼とはそんな話をしていた。長姉は、相手の男と会うたびによけいがっかりして帰ってきた。そして、乗気な母の怒りと失望を想像して、どうにも術を知らないように彼に話し、うつむいて炭火をいじりまわす。

「ねえ、私、待つわ。……この前、池袋のとってもよく当る易者がいったの。来年の三月まで待ちなさいって。……今度の人の話、それまで決定しないでおいてくれないかな」

「つまり補欠扱いってわけ？ そりゃひどいな。ちょっと勝手すぎるよ」

「勝手だつてことくらいわかるけど、勝手なことしか考えられないのよ」

「なら、それを実現可能のことと思わないことだね」

「いそがれると困っちゃう。あとで向うだつて困るのよきつと」

「そりゃ、そんなことになったら、みんなが困っちゃうよ」

「ね？ だからさ。だから……」

「そんなにいやならやめるほかないさ。でも僕はいいと思うな。いいじゃねえか、あのへんで手を打ちなよ」

「手ぐらい打つけどさ。あとになつて困つたつて知らないわよ」

「こっちこそ知らないや」

「……期限さえ、くりやいいのよ。三月がすぎたら、私、どんな人のところへでも嫁くわ、でも三月がすぎないと、私、どうしても踏んぎりがつかないのよ」

「それまで引っぱつておこうっていうの？」

そんな会話が夜ごとくりかえされ、彼は、おそらく彼自身がそうであるように、長姉もまた、彼女の固有の納得の回路のようなものを離れては生きられない一人の人間であることを、骨と骨とが衝突しあうような印象といっしょに、はじめて意識したりしていた。

当人の兄夫婦が東京の家に訪ねてくるという前日、二匹の猫は籐椅子ごと庭の隅の松葉を積み重ねた日溜りに移され、そこで絡みあったボロ布のように眠っていた。夕食の時刻が近づき、タマは台所